

四季三葉 (四季三葉草)

- とけかゝる
こちや海
棠つぼみのまゝよ
うら山吹に若楓
藤色衣
ぬしとても
かざす袂の桜狩
その盃の 数よりも
おゝさへ 喜びありや喜びありや
幸ひこゝろに任せたり
千早振る
神の昔に
あらなくに
卯の花垣根白浪の
渚のいさじ
さくとして
あしたの花の富貴ぐさ
女子こゝろはしゃくやくに
思ふたばかり姫百合の
まだ葉桜も染めぬのに
そりやあんまりな梨の花
気も石竹に軒の妻
菖蒲も知らで折添へて
- いつか手生けの床の花
もとの座敷へおもと
おなおりそうらへ
よすがまじや
さはらば一枝参らしよう
そなたこそ
君が由縁の色見草
うつろう水にかきつばた
池のみぎわに鶴亀の
縁し嬉しき踊り花
女郎花
宵の約束小萩がもとで
尾花招けばいとすつき
通ふ心の百夜草
こちや 真実いとしらし
そうぢやいな
しほらしや
時雨の紅葉寒菊や
水仙清き枇杷のはな
花の吹雪の
さらさらさつと
山茶花や
恵みに花の勲しは
- とつとつたらり
たらりたらりあがり
ららりとう
ところ千代まで変らぬ色の
みどりたつ春
まつの花
曾我菊の
名も翁ぐさ
そよやいつくの
はなの滝
れいれいと落ちて
水の月
素袍の袖も千歳の
梅が香しとつづくいすも
初音床しきわが宿の
竹もすぐなるひと節に
うつつして四季の三葉草
立舞う姿いとはえて
桃は初心に柳はませた
風のもつれに

千代に八千代の玉椿
眺めつきせぬ花の時
今も栄えて清元の
治まる
家とぞ祝しける。